

# 保育学生の ICT 経験と情報教育に関する調査

## —ICT 不安の観点から—

伊藤 夏帆  
(株)オービックビジネスコンサルタント

瀬々倉玉奈  
(発達教育学部児童学科)

保育現場における ICT の利活用が求められている。ところが、ICT 化が十分には進んでいないことが確認されている。そこで、幼稚園教育実習及び保育実習における ICT 利活用の経験と ICT 利活用に関する印象との関係を調査した。まず、実習において実際に ICT システムを使用した経験を持つ学生は他の学生に比して ICT 不安が低いことが確認された。次に、ICT の利活用が実習園で無かったと認識している学生は ICT の利活用による期待度が高いにも関わらず、ICT 不安が高いことが明らかになった。また、1 回生時に履修する必修科目の「情報リテラシー基礎」に関する認識について調査したところ、保育現場に即した実践的な学びを希望している学生が多いことが明らかとなった。

キーワード: 情報リテラシー, 情報コンピテンシー, 情報教育, 保育, ICT

### 1. 保育ニーズの高まりと ICT の利活用

我が国では少子化問題が深刻化する一方で、女性の就業率向上等に伴い保育ニーズが高まっている。待機児童の解消、女性の就業率上昇を踏まえた保育の受け皿の整備、地域の子育て資源の活用を進めることを目標にして、2020 年 12 月 21 日に「新子育て安心プラン」が公表され、4 年間で約 14 万人の保育の受け皿を整備するほか、地域の特性に応じた支援、魅力向上を通じた保育士の確保、地域のあらゆる子育て資源の活用を柱に各種取組が推進されている。特に、保育人材の確保については、保育士の有効求人倍率は 2022 年 7 月時点で 2.21 倍と非常に高い数値となっており、保育人材の確保は喫緊の課題と言える。東京都福祉保健局の「平成 30 年度東京都保育士実態調査報告書」によると、退職意向の理由には「給料が安い」(68.7%)、「仕事量が多い」(61.9%)、「労働時間が長い」(47.4%)等が挙げられており、保育士の業務負担の軽減が強く求められていることは明らかである。

上述した状況を踏まえ、2015 年に文部科学省において「園務改善のための ICT 化支援事業」が、2016 年には厚生労働省において「保育所等における業務効率化推進事業」が開始されるなどしており、

政府が保育現場の ICT(Information and Communication Technology)導入を推進するようになっている。経済産業省が 2018 年に提示した「保育現場の ICT 化自治体手続等標準化検討会報告書」でも、保育の ICT 化が進むことは、保育士等の業務負担軽減に繋がり、さらに業務負担が軽減された分の時間を有効活用することで、保育の質の向上が期待できるとしている。また、ICT 化によって子どもの成長に関する情報をデータ化することで分析等にも活用でき、科学的根拠に基づいて保育の質向上に繋げていくことが可能となるとも考えられており、保育現場の ICT 化が求められている。

ところが、依然として ICT 化に踏み切れない園が少なくないのが現状である。これについて中津(2021)は、予算の問題、サービスを導入しても情報リテラシー(literacy: 情報を使いこなす知識や操作技術能力)や情報コンピテンシー(competency: 情報化に対応する能力)が低いために十分活用されていないこと、養成校の情報教育が情報リテラシーや情報コンピテンシーの獲得につながっていないことなどが挙げられるとしている。

そこで、本研究では ICT に対する不安感やシステムを使いこなすための機械操作能力の不足などの

情報リテラシー及び情報コンピテンシーの不足を「ICT 不安」と総称し、保育者養成校における情報教育に着目することとした。

## 2. 研究の目的と方法

### (1)目的

本研究では、大学で情報科目を履修した本学学生が自身の受けた情報教育にどのような認識を持っているのか、また、実習等で ICT を体験的に学ぶ機会の有無などについて調査する。その調査結果をもとに、保育学生の ICT 不安を解消して保育現場での積極的な利活用につなげるためには大学において、どのような教育が必要かを検討することを目的としている。

### (2)方法

本研究は以下の方法で実施した。

調査期間：2022年10月28日・29日

調査方法：Google フォームの無記名アンケート

調査対象：調査時点で全ての実習を終えている本学児童学科4回生を調査対象とした。児童学科4回生のグループ LINE で依頼したところ、104名のうち回答者は52名であり、回収率は50.0%であった。

本学児童学科の学生のうち、幼稚園教諭免許取得希望者は2回、保育士資格取得希望者は3回、両方の資格を取得する場合は計5回の実習を行っている。また、本調査対象の学年は、入学時から全学共通のノートPCを配布されている。1回生時は通常講義を受けており、2回生時からコロナ禍によって一時期は全授業がオンラインによって行われた学年である。

アンケート項目は、経済産業省の「保育現場のICT化・自治体手続等標準化検討会報告書」、糟谷(2019)の「幼児教育・保育施設における情報化の現状と課題についての一考察」、中津(2021,前掲書)の「幼児教育・保育現場へのICT導入の現状と課題」を参考に以下のように構成した。実習でのICT体験に関する質問6問、ICTや自身のITリテラシーへの認識を問う質問2問、本学の情報科目に関する質問4問、情報関連の授業に対する希望に関する質問5問の計17問である。

倫理的配慮：調査にあたり回答は無記名とし、調査

結果については、筆者らの管理下で研究に活用する可能性がある旨を明記した。

## 3. 結果

### (1)実習園でのICT経験とICTへの認識

表1に学生が実習をした施設でのICT利用状況について示す(n=52)。本学児童学科学生の大半は幼稚園教諭免許及び保育士資格を取得する。幼稚園教諭免許取得希望者は、認定こども園を含めた幼稚園で、幼稚園教育実習Ⅰ(指定園)・幼稚園教育実習Ⅱ(自己開拓園)を履修する。また、保育士資格取得希望者は、保育実習Ⅰ(指定保育所・園)・(指定施設)、保育実習Ⅱ(自己開拓保育所・園)または保育実習Ⅲ(自己開拓施設)を履修する。保育実習Ⅰ(指定施設)については、18歳以上を対象とした施設が多く含まれているため、本調査では対象外とした。どの実習を履修したか、どの園でICTの利活用が見られたかについての質問は、幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱ、保育実習Ⅰ(指定保育所・園)・Ⅱの選択肢を用意し複数回答とした。保育実習Ⅲについては実習先の種類が多様であるため施設の種類とともに自由記述での回答を求めた。また、これまでの実習全てを通してICTが利用されていたかどうかの認識についての質問は、「あった」「なかった」「わからない」の選択肢を挙げて1択回答としている。なお、ICTの有無ではなく、「有無の認識」としたのは、実習園でICTシステムが導入されていたとしても、学生がそれらを目にしていなかった場合が有りうると思ったからである。幼稚園、保育園、こども園を比較すると、幼稚園教育実習全体では18.2%、保育実習全体では21.3%、認定こども園での実習全体では36.0%の園でICTの活用が認められ、中でも認定こども園での利用率が一番高いことが明らかとなった。しかしながら、先述の通り、ICTの有無についてはあくまでも学生が認識できたものが対象となっており、学生が見ていないだけで実際には活用されている場合もある点については留意する必要がある。

表2に実習先で認められたICTの利活用の具体例について尋ねた結果を示す。経済産業省が2018年に発表した「保育現場のICT化・自治体手続等標準化検討会報告書」で、保育事業者におけるIoT/IT技術の導入例として列挙している内容をもと

保育学生の ICT 経験と情報教育に関する調査

表 1 実習履修状況と実習先での ICT の利活用有無の認識 人(%)

実習の種類	実習履修者 人数(%)	ICT 活用あり 人数(%)
幼稚園教育実習Ⅰ	51 (98.1)	6 (11.8)
幼稚園教育実習Ⅱ	48 (92.3)	12 (25.0)
幼稚園教育実習 小計	99 (95.2)	18 (18.2)
保育実習Ⅰ(保育園)	39 (75.0)	4 (10.3)
保育実習Ⅱ(保育園)	22 (42.3)	9 (40.9)
保育園実習 小計	61 (58.7)	13 (21.3)
保育実習Ⅰ(こども園)	14 (26.9)	4 (28.6)
保育実習Ⅱ(こども園)	11 (21.2)	5 (45.5)
こども園実習 小計	25 (24.0)	9 (36.0)
保育実習Ⅲ(児童館)	3 (5.8)	0 (0.0)
保育実習Ⅲ(児童発達支援施設)	3 (5.8)	2 (66.7)
保育実習Ⅲ(児童養護施設)	2 (3.9)	0 (0.0)
保育実習Ⅲ(障害者施設)	1 (1.9)	0 (0.0)
保育実習Ⅲ(乳児院)	1 (1.9)	0 (0.0)
保育実習Ⅲ(母子生活支援施設)	1 (1.9)	0 (0.0)
保育実習Ⅲ(施設の記入無し)	1 (1.9)	0 (0.0)
その他の保育実習 小計	12 (3.3)	2 (16.7)
実習全体の合計	197 (29.1)	42 (21.3)

に選択肢を設け、複数回答可として回答を求めた。全体の 38.5%で ICT の利活用が認められなかった一方で、実習生が認識した使用率が特に高かったのは、登園管理システム(利活用中 68.8%)であり、次い

で検温・体温記録(19.2%)、日誌や保育計画の作成(17.3%)等での利活用が確認された。選択肢以外の内容は自由記述で回答するよう求めたところ、「午睡チェック」「遊びコーナーの人数制限、遊びコーナーの滞在時間、給食にかかった時間、園庭の人数把握、その日の子どもたちの様子を保護者と共有(遊びコーナーの滞在時間などがみられる)」という回答があった。

表 3 に実習園での ICT 体験として、実習中に施設の ICT システムにどの程度触れたかについて回答を求めた。ICT ツールを「実際に使わせていただいた」

表 2 ICT の利活用の具体例 人(%)

ICT の利活用	人数	利活用(%)	全体 (%)
登園管理	22	68.8	42.3
検温・体温記録	10	31.3	19.2
日誌や保育計画の作成	9	28.1	17.3
園だより等のお知らせ	8	25.0	15.4
連絡帳	5	15.6	9.6
園児の成長記録	5	15.6	9.6
バス運行管理	4	12.5	7.7
写真販売	4	12.5	7.7
利用しているが内容までは不詳	3	9.4	5.8
利用している園はなかった(未利用)	20	—	38.5

表 3 実習園での ICT 利活用経験 人(%)

実習における ICT 体験	人数 (%)
実際に使わせていただいた	3 (5.8)
見るだけにとどまった	14 (26.9)
紹介はされたが見たり触ったりはしなかった	14 (26.9)
利用しているかわからなかった、なかった	21 (40.4)

学生は 5.8%に過ぎなかった。一方、「利用しているかわからなかった、なかった」と回答した学生が 40.4%であった。あくまでも学生が実習の中で認識した範囲であったとしても、保育現場において ICT の利活用が活発におこなわれているとは言いがたい現状が再確認された。

表 4 は表 3 の実習園での ICT 経験と ICT への認識との関係を示す表である。ここで、ICT への認識の内容については、糟谷(2019,前掲書)を参考している。ポジティブな印象として、「業務が効率化されると思う」「保育の質が向上すると思う」「人為的なミスが減りそう」という選択肢を設けた。ネガティブな選択肢としては、「情報漏洩などセキュリティの心配がある」「使いこなせるか不安」「メリットや必要性がわからない」「費用がかかりそう」「保護者への直接的な対応の機会が減りそう」「柔軟な対応ができなくなりそう」という選択肢とした。

ICT 利活用で「業務が効率化されると思う」と回答している学生は 92.3%にも達している。また、この他のポジティブな印象の「人為的なミスが減りそう」が 51.9%、「保育の質が向上すると思う」が 48.1%と約半数の学生が回答している。一方、ネガティブな印

象の項目の中でも、「メリットや必要性がわからない」「柔軟な対応ができなくなりそう」の二項目の回答については 0.0%である。ネガティブな印象の中では「情報漏洩などセキュリティの心配がある」と「使いこなせるか不安」が共に 30.8%と相対的に高くなっている。

## (2)情報科目についての認識

以下に、本学で開講されている情報科目についての保育学生の認識について調査した結果を記す。本学児童学科では、「情報リテラシー基礎」が情報科目の唯一の必修科目である。第 1 筆者やアンケート調査対象の 4 回生が履修した 2019 年度の主な内容としては、コンピュータの基礎、タイピングや情報管理、情報収集とメディアリテラシー、Office 系ソフトの基礎、コンピュータシステムとコミュニケーションツール、問題解決とロジカルシンキング、アルゴリズム等が扱われていた。授業の中で覚えているものを問う質問では、調査対象の 4 回生が回答しやすいよう、第 1 筆者がシラバスを閲覧する前に、自身の記憶を基に「タイピング」「Office 系ソフトの使い方」「著作、などサイバー犯罪」といった項目を作成し、その他に

表 4 ICT 利活用経験と ICT への認識との関係

人(%)

	実際に使わせていただいた	見るだけにとどまった	紹介はされたが見たり触ったりはしなかった	利用しているかわからなかった、なかった	合計
項目毎の回答者数 人数 (%)	n=3	n=14	n=14	n=21	n=52
業務が効率化されると思う	2 (66.7)	13 (92.9)	13 (92.9)	20 (95.2)	48 (92.3)
保育の質が向上すると思う	1 (33.3)	6 (42.9)	8 (57.1)	10 (47.6)	25 (48.1)
人為的なミスが減りそう	2 (66.7)	7 (50.0)	6 (42.9)	12 (57.1)	27 (51.9)
情報漏洩などセキュリティの心配がある	1 (33.3)	1 (7.1)	3 (21.4)	11 (52.4)	16 (30.8)
使いこなせるか不安	0 (0.0)	4 (28.6)	3 (21.4)	9 (42.9)	16 (30.8)
メリットや必要性がわからない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
費用がかかりそう	1 (33.3)	1 (7.1)	4 (28.6)	5 (23.8)	11 (21.2)
保護者への直接的な対応の機会が減りそう	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	7 (33.3)	7 (13.5)
柔軟な対応ができなくなりそう	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

保育学生の ICT 経験と情報教育に関する調査

表 5 「情報リテラシー基礎」の授業内容の記憶

授業内容の記憶	人数 (%)
タイピング	50 (96.2)
アプリの操作方法	49 (94.2)
情報に関する法律・権利	29 (55.8)
サイバー犯罪	20 (38.5)

については自由記述で回答するよう求めた。

表 5 に上記の手順で尋ねた「情報リテラシー基礎」の授業内容で記憶しているものを尋ねた結果を示す。「タイピング」や Word、Excel、Power Point などの「アプリの操作方法」では、それぞれ 96.2%、94.2% が記憶しているとした一方で、著作権など「情報に関する法律・権利」は 55.8%、フィッシング詐欺など「サイバー犯罪」は 38.5% となっている。なお、自由記述でその他の内容を回答した者はいなかった。

次に、「情報リテラシー基礎」の授業内容と保育現

場との関係について 5 件法で尋ねた結果を記す。この項目の作成にあたっては、中津(2021, 前掲書)の調査を基に第 1 筆者が独自に作成した。

表 6 は授業「情報リテラシー基礎」について得点の高い方から、「とてもそう思う(5 点)」、「そう思う(4 点)」、「どちらとも言えない(3 点)」、「そう思わない(2 点)」、「全くそう思わない(1 点)」とする 5 件法で印象を尋ねた結果である。「保育の現場で役に立つと思う」についての平均値が 4.1 ポイントに対して、「授業だけでは保育の現場に出たときに不安がある」も 3.8 ポイントとなっており、「情報リテラシー基礎」の授業内容は役に立つが、それだけでは不安であると読み取ることができる。

では、その不安解消のために、必修科目以外の選択科目について履修するなどの対応行動に出ているのだろうか。本学では表 7 に示すように情報系の選択科目が数多く開講されているが、履修したのは

表 6 授業内容の評価

人 (%)

	とても そう思う 人数 (%)	そう思う 人数 (%)	どちらとも 言えない 人数 (%)	そう 思わない 人数 (%)	全くそう 思わない 人数 (%)	Ave.	SD
保育の現場で役に立つと思う	14 (26.9)	30 (57.7)	7 (13.5)	1 (1.9)	0 (0.0)	4.1	0.69
授業の内容で十分である	4 (7.7)	18 (34.6)	24 (46.2)	6 (11.5)	0 (0.0)	3.4	0.79
授業だけでは保育の現場に出たときに不安がある	11 (21.2)	24 (46.2)	10 (19.2)	7 (13.5)	0 (0.0)	3.8	0.94

表 7 京都女子大学児童学科で履修可能な情報系の選択科目

情報系の選択科目	内容
情報リテラシー応用	Office 系ソフトの応用・実践的な操作、情報活用のための文書表現や数値分析、ビジュアル表現
情報コミュニケーション A	IT パスポート試験(テクノロジー系)の対策
情報コミュニケーション B	IT パスポート試験(マネジメント系)の対策
情報コミュニケーション C	IT パスポート試験(ストラテジー系)の対策
情報コミュニケーション D	パソコン検定 3 級～2 級を目指したパソコン・OS 知識の習得
情報コミュニケーション E	パソコン検定 3 級～2 級を目指したネットワーク・セキュリティ系知識の習得
情報コミュニケーション F	2 次元・3 次元の CG の処理とデザイン
情報コミュニケーション G	MS-Access を用いたリレーショナルデータベース
情報コミュニケーション H	Web を通してデータベースを利用するためのシステムのつくり方 (HTML、CSS、PHP)、API の仕組み・利用プログラム

僅か3名であり、その内の1名は途中で履修を中止している。

表8に回答者自身のITリテラシー(情報処理能力やICTツールを操作する能力等)に関する自信の程度を自信の高い順に、「とても自信がある(5点)」、「自信がある(4点)」、「どちらとも言えない(3点)」、「自信がない(2点)」、「とても自信がない(1点)」とする5件法で尋ねた結果を示す。ITリテラシーに自信があると回答した学生は僅か5.9%に過ぎず、自信がないと回答した学生は43.2%に及んでいる。なお、「とても自信がある」「自信がある」と回答した3名と、情報系の選択科目を履修した3名とは重複していない。

表9に情報系の選択科目を履修しなかった理由

表8 ITリテラシーに対する自信

自信	人数 (%)
とても自信がある	1 (2.0)
自信がある	2 (3.9)
どちらとも言えない	26 (51.0)
自信がない	19 (37.3)
とても自信がない	3 (5.9)
平均	2.6
偏差	0.75

有効回答 N=51

について尋ねた結果を示す。「授業の存在は知っていたが興味がなく履修していない」と回答した学生が48.1%に達している。

では、保育学生は、どのような内容が含まれる情報教育科目を希望しているのだろうか。表10に情報関連の授業内容に対する希望について、表6と同様に5件法で尋ねた結果を示す。第1筆者の経験から、「ICTシステムを実際に使う授業が欲しい」、「クラスだよりや、卒園式などで使うPower Pointのスライドの作り方など実務で使える技能を教えてほしい」、「情報漏洩やサイバー犯罪の対策についてもっと知りたい」、「データ分析についてもっと知りたい」という

表9 選択の情報科目を履修しなかった理由

情報リテラシーの履修状況	人数 (%)
授業の存在は知っていたが興味がなく履修していない	25 (48.1)
興味はあったが授業やテストが面倒で履修していない	7 (13.5)
履修したかったが他の授業との関係で履修できなかった	7 (13.5)
そのような授業があることを知らなかった	10 (19.2)
履修した	3 (5.8)

表10 情報関連の授業内容に対する希望

	とても そう思う 人数(%)	そう思う 人数(%)	どちらとも 言えない 人数(%)	そう 思わない 人数(%)	全くそう 思わない 人数(%)	Ave.	SD
システムを実際に使う授業が欲しい	11 (21.2)	29 (55.8)	10 (19.2)	2 (3.8)	0 (0.0)	3.9	0.74
クラスだよりや卒園式などで使用するスライドの作り方などの実務的な技能を教えて欲しい	21 (40.4)	24 (46.2)	5 (9.6)	2 (3.8)	0 (0.0)	4.2	0.77
セキュリティ対策をもっと知りたい	15 (28.8)	26 (50.0)	10 (19.2)	1 (1.9)	0 (0.0)	4.1	0.74
データ分析についてもっと知りたい	13 (25.0)	27 (51.9)	11 (21.2)	0 (0.0)	1 (1.9)	4.0	0.80

表 11 実務的な授業の必修・選択の希望

必修・選択	人数 (%)
必修授業	22 (42.3)
選択授業	30 (57.7)

表 12 選択でも受けたいか

選択でも受けたいか	人数 (%)
選択授業であっても履修したい	29 (55.8)
選択授業であれば履修しない	21 (40.4)
未回答	2 (3.8)

項目を設定し、それぞれの希望度について5件法で回答を求めた。希望度の最も高い度合いを5点、最も低い度合いを1点として、当てはまる程度を選択するよう求めている。「クラスだよりや、卒園式などで使う PowerPoint のスライドの作り方など実務で使える技能を教えて欲しい」が4.2ポイントで最も高くなっているが、いずれの項目も3.9ポイント以上と高ポイントであり大差は無い。

表 11 に、もしも実務的な授業が開講された場合の扱いについて、必修または選択の別を尋ねた結果を示す。

表 12 では、さらに選択授業として開講された場合、どの程度履修したいか尋ねた結果を示す。履修希望者が高いとの予測を裏切り、学生の40.4%が「選択授業であれば履修しない」と回答している。

表 13 に実務的な授業が開講されるとしたら、何回生で履修したいか尋ねた結果を示す。「3 回生」の34.6%、「2 回生」の23.1%「何回生でもよい」と「1 回生」が同数の15.4%ある。

表 13 履修したい学年

学年	人数 (%)
1 回生	8 (15.4)
2 回生	12 (23.1)
3 回生	18 (34.6)
4 回生	6 (11.5)
何回生でもよい	8 (15.4)

#### 4. 考察

2. (1)で述べたように、本稿の目的は、大学で情報

科目を履修した本学学生は自身の受けた情報教育にどのような認識を持っているのか、また、実習等で ICT を体験的に学ぶ機会があったかどうか等について調査することである。さらに、保育学生の ICT 不安を解消して保育現場での積極的な利活用につなげるためには大学においてどのような教育が必要かを検討することである。

以下に、実習での ICT 経験、情報教育での学びについて考察した上で、ICT 不安の解消について検討する。

##### (1)実習での ICT 経験

本稿の 3. (1)において、保育実習及び幼稚園教育実習における ICT 経験について調査した。

表 1 の「実習履修状況と実習園での ICT 利活用有無の認識」において、幼稚園、保育園、こども園の種類別では、こども園の利用率が高いことが明らかとなっている。「子ども園」という新たな制度のもとで施設等を整備した際に ICT システムが導入される場合が多いのではないかと推察された。

また、幼稚園教育実習、保育実習ともに、I よりも II の方が、ICT の利活用が認められたと回答した割合が2倍程度に増加していることから、2 度目の実習では1 回目以上に実際の業務を見せていただいた可能性が示唆された。加えて、コロナ禍の影響で調査対象である児童学科 4 回生の大半の保育実習の実施時期が1 年度分繰り上がっている。保育実習 I と幼稚園教育実習 I を行ったのは2021 年度の3 回生時、幼稚園教育実習 II と保育実習 II とを行ったのは2022 年度の4 回生時であった。なお、通常は、保育実習 I を2 回生時に、保育実習 II を3 回生時に行っている。コロナ禍によって、年々 ICT の導入が進んでいったこととも実習 I よりも実習 II の方が ICT の利活用がより多く認識されるようになった原因の一つではないかと考えられる。

表 3 の「実習園での利活用経験」の調査結果からは、あくまでも学生が実習の中で認識した範囲ではあったとしても、保育現場において ICT の利活用が活発におこなわれているとはいいがたい現状が再確認されている。

従って、これから新しく保育現場に臨むこととなる保育学生には、保育現場における ICT 利活用のフ

ァシリテータとなることが自ずと求められると言ってよい。

保育者となるための保育現場での実習において、実際に ICT を使用した経験がある学生は、園での ICT の利活用に対してネガティブな印象よりもポジティブな印象を持つ割合が大きく上回っていた(表 3・4)。実際にシステムに触れることで、業務効率化や人為的ミスの減少などについて実感を持つことができたことが理解できる。また、「使いこなせるか不安」というネガティブな項目を選択した回答者は皆無で、実習という短期間であっても簡単に利活用が可能であったと推測される。

表 5 からは、実習で自らは ICT を使用しておらず、実際の利活用の様子を見たり説明を受けたりといった形に止まっている場合であっても、実習園で利活用の実験を知ることで、ICT 導入の価値を実感していることが伺える。

一方で、表 3 において、「実際に使わせていただいた」と回答した者には皆無だった「使いこなせるか不安」(表 4)という項目について、表 5 では 28.6%の学生が該当していると答えている。ICT 不安は、リテラシーの不足のみならず、コンピテンシーとの関係が影響することが示唆される結果である。ICT 利活用にあたっては、十分な説明や研修が必要であることが確認できる。

第 2 筆者は、「保育実習Ⅱ」の統括責任者を務めてきた。保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰの経験を踏まえた上でより深く実践的に保育を学ぶこと、加えて多様な保育の在り方についても学ぶことが求められている。これまで、実習園に依頼する際には、「ご事情の許す範囲で」と断った上で、実習生に学ばせて頂きたい内容を具体的に記している。ここに、ICT の利活用についての内容を加えることが必要であると考えられる。

## (2)情報教育

本学の児童学科の学生が 1 回生で履修する必修科目「情報リテラシー基礎」の授業内容について調査している。「保育の現場で役に立つと思う」についての平均値は 4.1 と高ポイントである一方、「授業だけでは保育の現場に出たときに不安がある」も 3.8 ポイントと拮抗しているという特徴的な結果が認められ

ている(表 6)。これは、情報リテラシーという観点から、情報に関する知識や操作技術は保育現場で大いに役に立つと感じる一方で、実際に使いこなすことが出来るかどうか、つまり、コンピテンシーに関しては不安であると解釈できる。

## (3)ICT 不安

ICT の積極的な利活用にあたっては、ICT リテラシーとコンピテンシーが相補的に作用する。本調査の結果からは、リテラシーにさえ自信がない者が目立ち、ICT を使いこなす能力であるコンピテンシーに至ってはかなりハードルが高いことが理解できる。

一方で、実習においては、実際に ICT を自分では利活用しておらず、システムを見たり説明を聞いたりする経験をしたのみであっても、ICT の利活用についてポジティブな印象をもつことが分かっている(表 5)。

さらには、実習園での ICT 利活用状況は不明、もしくは無かったと認識している者であってさえ、ネガティブな印象よりもポジティブな印象が上回っている(表 6)。ただし、情報漏洩への心配や使いこなせるか不安だとする項目は、実際に ICT を使用したり、説明やシステムを見たりしただけであっても経験している者と比較すると高い傾向にある。

このように考えると、より保育現場に添った ICT リテラシー教育と共に、コンピテンシーを意識した実践的な経験を積むことができる教育が必要である。保育学生の情報リテラシーやコンピテンシーの向上、活性化は、情報教育分野の科目担当者のみならず、保育・幼児教育に携わる教員にも問われている課題であると言ってよい。

実際に園で ICT を使った学生、見るだけにとどまった学生、見たり触れたりすること無く紹介にとどまった学生、利用しているかわからなかった学生の 4 グループに分けて、ICT に対する認識を調査した(表 4)。その結果、ポジティブな印象もネガティブな印象も、ICT を使用させていただいた学生よりも園での ICT 経験が無い学生の方が高くなる傾向を示した。ICT への期待値は高いものの、実際に使用したり、保育者が使用しているのを見学したりはしていないことにより、使いこなせるかどうかの不安や、保護者との直接的な対応の減少に対する懸念、セキュリティ等への心配が強い傾向が認められた。

本学の情報科目に対する認識としては、本学唯一の情報科目必修授業である情報リテラシー基礎の授業を84.6%の学生が「保育の現場で役に立つと思う」とする一方で、「授業の内容が十分である」に対しては42.3%と半減し、「授業だけでは保育の現場に出たときに不安がある」と感じている学生は67.4%に達している(表6)。これらのことから、児童学科の学生には、情報リテラシーの授業に加え、保育現場に活かせる内容を補う科目が求められていることが理解できる。

自分のITリテラシーについての認識を問う質問で、自信が無いとする学生が43.2%にも及ぶのに対して自信があるとする学生は僅か5.9%に過ぎず、多くの学生がICT不安を抱えていることが明らかとなった(表8)。

ところが、情報系の選択授業を自ら履修している学生は52名中わずか3名(5.8%)であり、そのうち1人は「履修したが難しく途中でやめた」と回答している(表9)。内容が発展的であり、ITリテラシーに自信がある学生でなければ難しいものになっていることが示唆された。このことは、保育学生の86.6%が求めている「クラス日より卒園式などで使用するスライドの作り方などの実務的な技能を教えて欲しい」との希望にマッチする選択科目が用意されていないことから裏付けることができる(表10)。

学生にとって選択授業を履修するか否かの要因としてシラバスが挙げられる(表7)。しかしながら、本学の情報科目のシラバスの授業内容や到達目標には、専門的な用語が多用されている傾向が認められる。調査当時、システムエンジニアを目指していた第1筆者などの情報分野に精通している学生でなければ、一読しただけではどのような授業であるのか理解しづらい内容なのではないかと推察される。これが、保育学生の多くが情報科目の選択授業に興味を持たなかった一つの要因と考えられる。情報技術に精通していない学生であってもその内容が理解でき、保育現場に活かせる内容を扱う授業があれば、これから保育者となる保育学生のICT不安は解消され、今後の保育現場におけるICT利活用のファシリテーターとしての役目も果たせ得るのではないかと考えられる。例えば、「情報リテラシーPowerPoint 実践」、「情報リテラシーWord 実践」などの科目が考えられ

る。

## 5. 結論

保育現場におけるICTの利活用の活性化には、将来、保育学生が保育現場のファシリテーターとなることが望まれる。保育学生のICTリテラシーを向上させ、コンピテンシーを活性化させるには、実習先におけるICTの利活用についても実習園への依頼内容に含めることも一案である。あわせて、保育・幼児教育に携わる教職員のICTリテラシーやコンピテンシーの向上が求められている。

## 引用・参考文献

- 伊藤夏帆(2023)保育者養成校における情報教育に関する研究,令和4年度卒業論文(未刊行),全37頁
- 株式会社野村総合研究所(2021)「令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業ロボット・AI・ICT等を活用した保育士の業務負担軽減・業務の再構築に関する調査研究」[https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/mcs/20210330\\_3\\_02.pdf?la=ja-JP&hash=02FA401604DC46DDC7205D1CB9890213046D2D03](https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/knowledge/report/mcs/20210330_3_02.pdf?la=ja-JP&hash=02FA401604DC46DDC7205D1CB9890213046D2D03)(2022年10月20日に閲覧)
- 糟谷咲子(2019)「幼児教育・保育施設における情報化の現状と課題についての一考察」,岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要(Web)51巻,p.41-56
- 経済産業省「保育現場のICT化・自治体手続等標準化検討会報告書」20180330001\_01.pdf (meti.go.jp)(2022年10月19日に閲覧)
- 厚生労働省「新子育て安心プランの概要」000717624.pdf (mhlw.go.jp)(2022年10月19日に閲覧)
- 厚生労働省「保育士の有効求人倍率の推移(全国)」<https://www.mhlw.go.jp/content/001018261.pdf> (2022年12月7日に閲覧)
- 文部科学省「課程認定を有していない大学における教育職員免許法施行規則第66条の6の証明について」[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kyoin/1381891.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1381891.htm)(2022年10月31日に閲覧)
- 文部科学省「教育支援体制整備事業費交付金(認

定こども園設置促進事業)実施要領」

[https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/5499/00420744/04\\_R3\\_kyouikushien\\_kuni\\_youryou.pdf](https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/5499/00420744/04_R3_kyouikushien_kuni_youryou.pdf)

(2022年10月31日に閲覧)

中津功一郎(2021)「幼児教育・保育現場へのICT導入の現状と課題」,大阪城南女子短期大学研究紀要 55巻,p.85-98

東京都福祉保健局「平成30年度東京都保育士実態調査報告書」

<https://www.fukushihoken.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/30hoikushichousa.files/330chosakekkanogaiyou.pdf>(2022年10月20日に閲覧)

#### 謝辞／付記

本稿は、第1筆者で現在システムエンジニアである伊藤(2023)の調査データをもとに、第2筆者である瀬々倉が再分析・再解釈し、図表等を書き換えた上で再構成しています。

コロナ禍において、学生の実習をお引き受け下さり丁寧に御指導いただいた実習園の皆様と調査に協力して下さった当時の学生に改めて感謝申し上げます。